

珂憶上人による四天王寺宝物寄進について

A Study of the Donation of Treasured Items to Shitennojji Temple by Kaoku

一本崇之

Takayuki ICHIMOTO

はじめに

元禄5年(1692)9月6日、四天王寺は、浄土宗僧・安福寺の^{かおく}珂憶上人より宝物の寄進を受けている。この寄進宝物は、唐櫃10棹に収められた総数144点に及ぶ大規模なもので、聖徳太子をはじめ、弘法大師・藤原定家・在原業平や王義之など、錚々たる作者が名を連ねたものであった。現在四天王寺には、この珂憶寄進宝物の大部が現存しているが、真贋が疑わしいものも多くあり、近代以降は一部の品を除いて、ほとんど顧みられることはなかった。

しかしながら、個人が一度にこれほどの宝物を寄進するという行為は極めて稀有な例であり、四天王寺史上において、特筆すべき事項として注目に値するであろう。このような宝物寄進を行うには、相応の理由と背景がなければ成し得ないものである。そこで小稿では、近世四天王寺史における特異な歴史的事象として、珂憶による宝物寄進を取り上げ、この寄進行為の実態を明らかにするとともに、その背景について若干の考察を行いたい。

1. 珂憶上人について

まずは、この宝物寄進を行った珂憶とはいかなる人物であったか。珂憶の事蹟については、彼の弟子・珂然の撰になる『玉手円信和尚行状』¹⁾(以下『行状』と略)並びに、これに基づいた池上博之氏の論考²⁾に詳しい。ここではまず、これらに拠りながら簡単に珂憶について確認しておきたい。

①出自と安福寺再興

寛永12年(1635)、珂憶は、若狭の人で新田義貞の後裔という里見義勝と、伴氏の出という母のもとに生まれる。寛永19年(1642)には、わずか8歳にして、江戸の靈巖寺珂山和尚のもとで剃髪している。万治2年(1659)25歳のとき、念仏修行の地を探すため江戸を立ち、京都をはじめ各地を巡る旅に出ており、この間、寛文4年(1664)に京都山科にて円信寺を創建した他、同6年(1666)には、河内の安宿郡山中の廃寺となっていた安福寺を再興し、ここに仏殿・経房・僧舎・鐘楼・厨倉等を建立している。この仏殿は棟を低く造り、柱を大きくすることにより大地震にも耐えうる独特の構造で、俗に「聖徳太子式珂憶建」と呼ばれている。これは、かつて法隆寺を建立した渡来人大工の一部が河内に移住し、その伝統を継承する集団の技術を珂憶が採用したこと由来するという。その人徳を慕って多くの人々から信仰を集め、

特に尾張藩徳川光友が深く帰依したことで知られている³⁾。

②珂碩と珂憶

珂憶ははじめ珂山に師事したが、珂山が「寺務蝟集無暇函丈為患」⁴⁾のため、正保2年(1645)、珂山の高弟である珂碩の弟子となっている。これ以後、珂憶と師の珂碩は深い絆で結ばれ、珂憶が江戸を出て河内安福寺に終生の地を定めた後も、折に触れて珂碩の支援を行っている。珂憶は寺院や仏像の造営に長けており、前述の円信寺創建や安福寺再興をはじめとして、珂碩の浄真寺の開創にも大きな役割を果たした。このような珂憶の才覚に対して、珂碩も厚い信頼を寄せており、自身の後継として珂憶を強く望んでいた。元禄3年(1690)には、珂碩より後住の申し出があったが、珂憶は病身を理由にこれを断っている。しかし、元禄7年(1694)に再度、珂碩からの強い要請があったことから、3日間だけ浄真寺の住持となり、その後は弟子の林碩に住職を譲ることとした。自身の住持する安福寺を離れることもできないため、形だけではあるが師の意志を尊重したのである。その負い目があればこそ、後の浄真寺九品仏堂造営へ彼を突き動かす動機となったのであろう。

③浄真寺九品仏堂の造営

さて、珂憶の師・珂碩は、出家後間もない寛永12年(1635)頃に九品仏像の造立を發願している⁵⁾。珂碩は、この造立發願の趣旨を「我平生志願不欲一毫一芥受檀越佗人之財又不欲勸進衆力」⁶⁾として、勸進を行わず、日に3文という少額の蓄えのみを造仏に充てるという姿勢を取っていたため、發願以来30年もの月日が流れても遅々としてその造立が進まなかった。これを聞いた珂憶は、当時住していた京都の円信寺より駆けつけ、その援助を申し出る。珂碩の趣意を守りながらも、急速に事業を進め、寛文7年(1667)に丈六九品仏像が完成する。9軀中6軀が珂憶による造像であった。さらに、阿弥陀の極樂浄土を教示する存在として丈六釈迦如来坐像も造立している。

この九品仏の造立の後、珂碩は越後村上の泰叟寺の住職となるが、延宝6年(1678)には村人の要請により、奥沢に浄真寺を創建し移住する。しかし、この浄真寺の当初の堂宇は極めて粗末なもので、丈六九品仏を安置する堂も「草堂」と表され⁷⁾、大風で倒壊するような極めて簡素なものであったようである。よって珂碩は、丈六仏を安置するにふさわしい九品仏堂の建造を發願するが、その志半ばにして元禄7年(1694)に遷化する。この意志を継いだ珂憶は、その造営に奔走することになるが、これについては四天王寺宝物寄進に関わってくるため後述する。そして元禄12年(1699)には、彼らの悲願であった九品仏堂3棟・釈迦堂が落成する。その後、宝永5年(1708)11月22日、珂憶は安福寺にて遷化。74歳の生涯であった。

2. 珂憶による四天王寺宝物寄進

①寄進宝物の四天王寺入山

珂憶の四天王寺への宝物寄進に関する記録は、天王寺楽所伶人の林家の記録である『四天王寺舞楽之記』⁸⁾ 第一「貞享元年ヨリ元禄七年迄」元禄5年9月9日条の附箋に記される。本書

は、四天王寺において執り行われた舞樂法要の舞樂の演目ならびにその舞人、管方などについて記した記録である⁹⁾。この附箋には、珂憶より寄進される宝物が四天王寺に迎えられる時の様子が詳細に記されている。

元禄五年_{壬申}年九月六日_陰 カラク坊_{ヨリ}宝物寄進天王寺入寺、石華表迄樂所各奏音樂迎納^(ママ)石華表之内左側_ニ立、盤涉調音取、千秋樂_ヲ吹始一行_ニ烈、次宝物唐櫃十棹次寺僧各些後再西門_ニ入、金堂之前仁王門_ヲ経_テ聖靈院_ニ入、北之門_ヲ出_テ安置宝蔵。其内東_ノ側立双樂始終音不絶。廿二日陰 巳刻出仕三昧堂_ニ待合、宝蔵_{ヨリ}案内アリ、各出迎新納之宝物拾櫃出蔵、先樂人二行奏慶雲樂、頭兼友、廣厚、昌純。次櫃棹_ニ供人壺人ツ、サイリヤウス。次寺僧各一先_ニ二舍利積尊之金鉢_ヲ童子_ニ持_テ行堂之内之作法常_ニ異也。宝蔵之次_ニ寺僧各居拜殿。堂之寺僧之座_ニ樂人座北頭西向、西之側_ニ堂司、堂聖等居聞寺僧之用已了。登高座平調音取、老君子、下高座_ニ鷄徳、次堂之例月之法用音樂盤涉調、早懺法之内_ニ迦陵頻舞昌信、胡蝶舞昌英、退出長慶子。

元禄5年9月6日、珂憶より寄進された宝物は、石鳥居より天王寺樂所の樂人の奏樂とともに四天王寺に迎えられる。2列に並んだ樂人に続いて、宝物を納めた唐櫃10棹と寺僧が列をなし、西門から金堂前、仁王門を経て聖靈院に入り、同北之門を出て宝蔵へ安置したとある。その間、終始奏樂は絶えることはなかった。そして22日には、新納の宝物10櫃を宝蔵より出し、樂人に先導され、各櫃に一人の供人と寺僧が付き添ったという。同書9月22日条には、「當月六日カオク寄付ノ宝物御蔵ヨリ出太子堂ノ内ニ納、例月之法用音樂アリ早懺法之内舞アリ」とあって、このとき宝蔵から出された珂憶寄進宝物は太子堂に納められたことが記される。

これらの記録により、珂憶による寄進宝物が唐櫃10棹に及ぶ大規模なものであったこと、また四天王寺もそれを樂人・寺僧が伴って石鳥居より迎え入れ、太子御忌日の22日には、奏樂とともにその宝前に奉られるなど、寺をあげて盛大に受け入れられたことが知られる。

②寄進宝物の全容

この時に寄進された10棹の唐櫃の中身は、四天王寺所蔵の『珂憶寄進宝物一番_{ヨリ}九番_ノ箱_江入覚帳』¹⁰⁾によってその全容を知ることができる。同書に年紀はないが、当初10棹の唐櫃が9箱に整理されたことを考えれば、寄進からやや時間を経て記されたものと推測される。後述の通り、同書には明和6年(1769)の見分の短冊が添付されているので、18世紀前半頃に書かれたものと推定される。

同書には、1番の箱より順に、その中に納められる宝物と作者を列記する。これを一覧にしたものが〔別表〕で、その総数は144点に及ぶ膨大なものである。なお、後筆により箱の番号を修正している箇所があり、これは9棹に分納されていた宝物を、ある時期にさらに6棹に整理して収納しなおしたものとみられる。〔別表〕では「整理後」として示している。現存の唐櫃は6棹であることから、これが裏付けられよう。また、幾度か見分が行われたとみられ、〈25〉「土佐記」・〈131〉「太子尊影」には明和6年8月8日付の附箋が貼られている¹¹⁾。

さてこの144点の宝物のうち、管見の限り110点の現存が確認できる。四天王寺は、元禄5年の寄進以降も、享和元年（1801）の雷火や昭和20年（1945）の大空襲によって伽藍を焼失してきたことを考えれば、奇跡的な残存状況であると言える。

〔別表〕を見ると、個々の宝物の作者には、聖徳太子や王義之など古代日本や中国の錚々たる人物が名を連ねている。ただし、これら110点の宝物を実際に通観すると、残念ながら記される作者の真筆と判断されるものは確認し得ず、明確に贋作とわかるものも多数含まれている。それ故、特に近代以降、四天王寺内においては「珂憶寄進宝物＝眉唾物」というレッテルが貼られる要因ともなった。一方で、特に珂憶の名は出てこないが、この時の寄進宝物が四天王寺什物として紹介されている例も確認できる。

例えば、寛政10年（1798）頃の『撰津名所図会』第二、四天王寺の宝器品目条には、「番匠器名号」「普門品」など5点が列記される他、文政2年（1819）の聖徳太子1200年御忌に伴って境内で実施された宝物開帳においては、10点が陳列されている¹²⁾。

その他にも、〈50〉「観音像」（安然和尚）は明代末、〈74〉「釈迦尊像」（思恭）は室町時代初頭の作とみられ【図1】、優雅な筆致の佳作も含まれており¹³⁾、近世における四天王寺什物の充実に少なからず貢献したことも見逃してはならない。特に、〈133〉「番匠器名号」【図2】は、番匠器（大工道具）で六字名号を模ったもので、『撰津名所図会』では「世にある図とは変りて奇雅にして其名高し」と評されている。また、近代以降においては、聖徳太子を番匠の祖として崇める信仰と結びついて、曲尺を持ったいわゆる「曲尺太子」とともに、番匠器名号がその信仰の象徴的役割を果たしている。現在の四天王寺においても、工事の際には必ず現場にこの「番匠器名号」旗を掲げて安全を祈願するとともに、境内の番匠堂においては、多くの建設業関係者の参列のもと、毎年11月22日に曲尺太子奉賛法要が厳修されており、現代に連なる太子信仰の一端を担っている。



【図1】 釈迦尊像



【図2】 番匠器名号

さて、これら珂憶寄進宝物の大きな特徴は、掛幅装の作品のほぼ全てに共通の裏書が記される点にある。〈124〉「麟鳳之大字」を例として挙げると、

摂州四天王寺伝来之宝物乱世紛擾散失尚矣余偶感得
之者若于数歳之艱苦多日之劳煩以裝飾之焉此年闔山
大衆胥議乞使寄納於舊庫而懇訴不措於之許之庶幾使
瞻仰伏拜之群衆同生安樂仏国因書其事于裝潢背云

元禄五^壬_申年 河州玉手山安福寺
九月廿二日 珂憶（白文方印）

珂山大和尚	珂碩大和尚
源正大居士	松寿院殿
宗清居士	寿法信尼 崇光院
大心院	常照院 真相院
安清院	樂清院 雲生尼
円實院	興心院 瑞光院
光陽院	林貞 松貞 了信 道鑑
榮長	友夕 良專 願心 是休
貞正	光徹 妙休 榮忍 現山
山哲	妙意 寿法 清安 入称

作願攝取 一切衆生
共同生彼 安樂仏国

とあり、寄進の経緯及び珂山大和尚・珂碩大和尚・源正大居士・松寿院をはじめとして、結縁者の名を列挙する。松寿院以下の結縁者名は作品によって多少異なるが、その他はおおむね共通している¹⁴⁾。なお源正大居士は徳川光友の法号で、松寿院は光友の側室である。

これを要約すると、四天王寺伝来の宝物は、乱世の混乱により失われてしまっていて久しい。私（珂憶）が感得した品々は、数年をかけて苦労して表装し整えたものである。この年（元禄5年）四天王寺の大衆が胥議し、同寺の旧庫に寄納してほしいとの願いがあったので、この旨を了承し、表装の裏に書き留めるものであるという。つまり、この裏書によれば、珂憶の宝物寄進は、四天王寺から依頼されたものであったことがうかがわれる。それ故、これらを寺に納める際には、楽人の奏楽とともに盛大に出迎えたわけである。

③宝物の収集と寄進の背景

ところで、これほどの数の宝物を一人で収集し、まとめて寄進をするということは並大抵の

ことでない。珂憶はこれらの宝物をいかに入手したのであろうか。この点を踏まえて、裏書に注目すると「余偶感得之者」とあり、珂憶が意図して収集したものではなく、思いがけず入手したものであることがうかがえる。ここで『行状』をみると、

江州彦城大守井伊侯宰輔木俣氏守安雖久帰仏乗慨未遇明師、一日詣伊勢天照太神廟心窃祈之將帰於宇治橋与師邂逅、見其氣宇非常傾蓋問道喜神助有実、自爾簡牘堆案招請頻繁、每師至第就寢之後躡而窺之加手其足以驗寒温、其敬愛優渥推此一事可以概見、嘗以黄金若干捨於玉手山、又辟支仏牙楚石禪師書賛慈学大師所彫西方三聖像并其所宝龕書画・重器施以為万代之鎮、其仏牙乃本邦成蔵主入呉所得者也 (※傍線部筆者)

とあり、珂憶に帰依した井伊家家老である木俣守安が、玉手山安福寺に黄金とともに書画・重器類を施入したことが記されている。全てがそうであると断定はできないが、四天王寺に寄進した書画類は、こういった施入等によって入手したものと推察される。

さて、では何故珂憶は四天王寺にこれほどの寄進を行ったのであろうか。裏書では、四天王寺からの要請に応じる形での寄進であったと記すが、当時珂憶は、尾張藩主徳川光友が深く帰依する高僧として知られていたとはいえ、裏書以外に四天王寺と珂憶とを結びつける史料は確認できず、四天王寺への宝物寄進は幾分唐突な印象を受ける。ここで、この寄進の背景について、確たる史料が見出せないため明確にはし難いものの、この時期の珂憶が置かれていた状況を踏まえながら、若干の考察を行ってみたい。

元禄7年9月23日、病臥していた珂碩は、見舞いに駆け付けた珂憶に対し「九品仏像本誓已就、堂寓莊嚴有志不遂、老朽体疲今将易簣、汝宜修立矣、身後之事皆付嘱汝」¹⁵⁾と告げ、九品仏堂をはじめとする浄真寺堂宇の莊嚴を珂憶に託した。そして同年10月7日、珂碩が遷化した後、珂憶は師の遺囑により九品仏堂の造営に奔走することになる。浄真寺には、同寺の住持であった林碩との書簡が残されており、この時期の珂憶は、その資金や資材の工面に相当の苦勞をしたようである。

しかし珂憶は、師への報謝としてこの事業に取り組むべく、勸進を行わないという、珂碩の九品仏発願の趣旨を継承した。それ故、「尾州大納言様へ材木・金銀御合力被遊候をも大誓言にて返し申候、又方々少宛心指寄進御座候も皆返し」¹⁶⁾と、徳川光友をはじめ各所からの協力・寄進の申し出も断っている。一方で、各地で勸進を行っていた浄真寺の住持林碩に対しては、

- 一、諸方にて林碩と名乗勸進いたし候由風聞候間、其元二外へハ勸進ニ出申候と札を立被申候てハ如何候哉、談合ニ而候
- 一、貴僧茶などを被致随分息才ニ建立可有候、必見くるしき心有間敷候

と非難の言葉を送っている¹⁷⁾。元禄10年(1697)の書簡では、「一大誓言ニ而今迄何方をも一銭請不申愚僧一人艱難苦勞、田畑も皆々売払此度乞食成申候」とまで述べ¹⁸⁾、誰にも頼らず、あくまでも珂碩にゆかりの人々の力での造営を目指していたことがうかがわれる。

このような珂憶の状況を鑑みれば、この時期に他社寺へ無条件に寄進をするような余裕は残念ながらもなかったはずである。つまり、四天王寺への宝物寄進は、単なる宝物の寄贈ではなく、浄真寺堂宇造営資金の調達に関わっているのではないかと推察されるのである。

宝物寄進は元禄5年のことであるが、九品仏堂の造営は、なかなか行動を起こさない林碩の影響もあり、元禄10年よりようやく開始される。これまで珂憶は、奥沢浄真寺への移転に際しても、土地や堂舎を建てる費用、その他大部分を用立てるなど、常に珂碩のことを気にかけていた¹⁹⁾。珂碩の九品仏堂造営への意志を十分に理解していた珂憶が、その造営に先駆けて、資金調達に動き出しているにもかかわらず何ら不思議ではない。

四天王寺への寄進は、四天王寺の要請を受けて宝物を寄進するという形をとっている点に特徴がある。珂憶が、田畑を残らず売り払ったように、自身が感得した什物類を資金に変えることを模索したことは容易に考えられる。しかし田畑とは異なり、あからさまに什物を売り払うことは、いくら浄真寺への資金調達のためとはいえ体裁が悪い。そこで建前上、先方から請われたが故に宝物を譲るという形をとって宝物を納め、それに見合うように金銭的な協力を得たのではないかと想像される。

ところで、珂憶は四天王寺以外にも、元禄5年（1692）6月10日に大阪・勝尾寺へ宝物9品²⁰⁾、また元禄6年（1693）2月21日には京都・大善寺に阿弥陀尊像一対を寄進していることが確認される²¹⁾。四天王寺に比べれば、その他の寺院への寄進の規模はさほど大きくはないが、四天王寺を挟んで元禄5年から6年にかけて集中的に寄進を行っており、前述のような交渉を、勝尾寺や大善寺等各地の有力寺院と行ったのであろう。そしてその中でもっとも大きく貢献したのが四天王寺であった。

これらの一連の宝物寄進からは、珂碩の信念を引き継ぎ、あくまで勸進は行わず、自身の財産を削って資金を調達していくという、珂憶の強固な意志が読み取られよう。珂憶による四天王寺への宝物寄進は、浄真寺九品仏堂造営における珂憶の資金調達の具体的な活動としてとらえることができ、師への報謝のため奔走した彼の足跡として位置付けられるのではないだろうか。

おわりに

以上、珂憶による四天王寺宝物寄進について、その全容を明らかにするとともに、当時の珂憶が置かれていた状況を踏まえながら、その位置付けについて考察した。そこには、師の意志を受け継ぎ、その遺囑された事業に取り組む珂憶のひたむきな活動の足跡を読み取ることができる。また、こうした資金提供を可能とした四天王寺の当時の豊かな状況も垣間見られよう。

本小稿では、主に四天王寺所蔵史料を中心として事実関係の確認に終始したが、いまだ安福寺には珂憶に関わる資料が数多く遺されているようであり、浄真寺等関連寺院の資料も含めて、今後さらに調査を進めることで、これら一連の事業がより明確になってくるであろう。このような歴史的事象の検討を通して、当時の社会と四天王寺がどのように関わり、どのような役割を果たしてきたのか、今後の課題としてその解明に取り組んでいきたい。

【謝辞】

本稿執筆にあたり、安福寺住職の大崎信宥師には、史料調査に際してご高配を賜った上、珂憶上人について数多くの貴重なご教示をいただいた。末筆ながら、ここに記して心より感謝申し上げます。

註

- 1) 安福寺所蔵。世田谷区立郷土資料館編『浄真寺 文化財総合調査報告』（東京都世田谷区教育委員会、1986年）所収。
- 2) 池上博之「珂憶上人と浄真寺の造営」註1前掲書所収。
- 3) 安福寺には、光友が寄進した「山水蒔絵硯箱」・「牡丹蒔絵硯箱」・「菩提樹蒔絵香篋」が伝わっており、重要文化財に指定されている。
- 4) 『行状』。
- 5) 珂碩の事蹟については、池上博之「珂碩上人と浄真寺の創建」（註1前掲書所収）に詳しい。
- 6) 「奥沢九品仏記」、註1前掲書所収。
- 7) 『珂碩上人行業記』（『浄土宗全書』17）、註1前掲書所収。
- 8) 南谷美保編『四天王寺舞楽之記（上巻）』清文堂出版、1993年。
- 9) 南谷美保「解題」、註8前掲書所収。
- 10) 「四天王寺所蔵文書」十一-12。
- 11) 「明和六丑年八月八日改／不見」とあり、存在が確認できなかったことを記す。
- 12) 『皇太子千二百回御忌御開帳記録 参』（文政2年）2月10日条、『四天王寺古文書 第2巻』所収
- 13) これら2作品は、石田茂作『秘宝 第3巻 四天王寺』（講談社、1968年）でも紹介されている。
- 14) 裏書の筆跡は数種の手があり、全てを珂憶が書いたというものではない。また、〈112〉「足助次郎旗」のみ若干文章が異なっている。

摂州四天王寺之靈宝乱擾紛散既有年矣予感得之居多辛勤經歲修補之也近闔山大衆就請寄附于舊庫者數
矣於此諾之願渴仰伏拝之衆同生彼安樂仏国焉因書其事于裝飾背云

元禄五^{壬申}歲 河州玉手山安福寺
九月廿二日 超蓮社珂憶（白文方印）

- 15) 『珂碩上人行業記』。
- 16) 「浄真寺文書」（珂憶上人書簡9）、註1前掲書所収。
- 17) 「浄真寺文書」（珂憶上人書簡9）、註1前掲書所収。
- 18) 「浄真寺文書」（珂憶上人書簡11）、註1前掲書所収。
- 19) 池上博之氏註2前掲論文。
- 20) 勝尾寺に元禄7年6月10日付の寄進状が伝わる。
同史料については、安福寺住職・大崎信宥師よりご教示いただいた。
- 21) 安福寺に大善寺松誉から珂憶に宛てた礼状が残る。

一礼之事

一元祖上人自画阿弥陀之尊像尅對
当寺_江納被下候寺末代之宝物_二仕
諸人結縁拜_セ申無失時可奉貴_候

宝物受納為置如此御座候以上

元禄六年癸酉年 伏見六地藏堂

二月廿一日 大善寺

松誉

珂憶和尚様参

〔別表〕『珂憶寄進宝物一番ヨリ九番ノ箱入覚帳』所載宝物一覧

箱番号		作品名	筆者・作者	註記・追記等
当初番号	整理後			
1	1	1 法華經	太子	
		2 勝鬘經	太子	
		3 維摩經	太子	
		4 明眼論	太子	
		5 十七憲法	太子	
		6 多羅葉	阿難尊者	
		7 素書	黄石公	
		8 破軍書	韓信	
		9 五法主人卷	張良	
		10 洞瀟図	徽祖皇帝	
		11 大乘起信論	曇鸞大師	
		12 詩卷物	陶淵明	
		13 詩卷物	杜子美	
		14 浄心誠観	元照律師	
		15 十七帖	王羲之	
		16 称讃浄土經	中將法如	
		17 本起論	智証大師	
		18 筆道明鑑	佐利	
		19 竜神之面	弘法大師	
		20 金剛頂經疏	慈覚大師	
		21 九相詩	東坡	
		22 法相抄	信舜上人	
		23 大和物語	花山法皇	
		24 天性治理卷	清明	
		25 土佐記	紀貫之	〔明和六己丑八月八日改ノ不見〕
		26 源氏（物語）	紫式部	
		27 詩五卷	白居易	
		28 観音經	清盛	
		29 朗詠	定家	
		30 源氏一卷	定家	
		31 歌仙	定家	
		32 歌仙	後白河院	
		33 古今集	俊寛	
		34 不動講式	定成	
		35 草庵集	頓阿	〔前中納言基孝添状〕

1		36	短冊十一枚	寂蓮・西行・俊成・定家・慈鎮・忠度・西明字・兼好・後京極義経・東山・頓阿	
2	1	37	丸名号	弘法大師	
		38	心経	弘法大師	
		39	南陽山額	弘法大師	
		40	大原額	弘法大師	
		41	大文字	弘法大師	
		42	大文字	弘法大師	
		43	大文字	弘法大師	
		44	金山彦額	弘法大師	追記
		45	名号	慈惠大師	
		46	名号	空也上人	
		47	名号	小野篁	
		48	心経	天神	
		49	尊勝陀羅尼	聖宝僧正	
		50	観音像	安然和尚	
		51	阿弥陀三尊像	永観	
		52	龍虎文字	紀友則	
		53	名号	性空上人	
		54	名号	西行上人	
		55	心経	文学上人	
		56	釈迦如来額	道風	
57	釈迦尊像	牧谿			
58	五節供因縁	伝教	追記		
59	未来記	楠正成			
60	神職并釈氏憲法	太子			
61	儒士憲法	太子			
62	神道拔	太子			
63	通蒙政家憲法	太子			
3	2	64	羅漢十八幅	東坡	「龍眼寺雪堪添状」
		65	鉄鉢		貼紙短冊
		66	行成之筆		
		67	子路之筆		
		68	顔面之筆		
		69	十六羅漢	善導	
		70	心経	三幅	
		71	添状		
4	3	72	釈迦尊像	曇鸞大師	
	2	73	三幅対	宝誌和尚	
	3	74	釈迦尊像	思恭	
	2	75	語	孟子	
		76	語	義之	
	4	77	語	寒山	
		78	語	拾得	
		79	語	司馬公	

珂憶上人による四天王寺宝物寄進について

4	3	80	琵琶絵賛	王照君	「張延子添状」
	4	81	語	楊子雲	
	3	82	語	張子厚	
	4	83	語	漢武帝	
		84	語	韓退之	
		85	語	楊中立	
		86	語	謝良佐	
	2	87	語	尹彦明	
	3	88	語	程明道	
	4	89	語	程伊川	
	3	90	語	孫思邈	
		91	語	游定夫	
		92	語	呂大臨	
	4	93	語	朱熹	
94		歌掛物	土御門院		
5	3	95	貞保親王旗		
		96	貞元親王旗		
		97	貞固親王旗		
		98	貞平親王旗		
		99	滿政公旗		
		100	重盛公旗		
		101	教経旗		
		102	清経旗		
		103	清経母衣		
		104	通盛旗		
		105	行盛旗		
		106	佐々木三郎旗		
		107	佐々木四郎旗		
		108	観音名号	景清	
109	楠正成旗				
110	赤松則祐旗				
111	備後三郎旗				
112	足助次郎旗				
6	6	113	名号詩	太子	
		114	生死大字	太子	
		115	無常大字	太子	
		116	阿弥陀尊像	恵慈法師	
		117	雲月額	中將法如	
		118	蓮台大字	恵心僧都	
		119	多田満仲公安置仏	恵心僧都	
		120	無量寿寺額	慈鎮和尚	
		121	清盛公母袋		
		122	大文字	定家	
		123	琴絵賛	伯牙	
		124	麟鳳大字	東坡	
		125	掛物	文彦博	

6	6	126	樹林大字	白居易	
7	4	127	維摩像	太子自画自賛	
		128	心経	太子	
		129	名号	太子	
		130	語十五幅	太子	
		131	太子尊影	恵心僧都	「明和六丑年八月八日改／不見」
		132	異国伝		追記
8	6	133	番匠器名号	太子	「六番箱入置／豎一丈五尺六寸一分横三尺七寸三分 軸外三寸六分」
	5	134	世尊大字	太子	
		135	説法	太子	
		136	仏法寺額	達磨大師	
	6	137	仏具名号	上宮皇	「六番箱入置／寸尺番匠名号ニ同」
	5	138	慧遠大師涅槃像	陸修静	
	6	139	陶淵明自筆記		
		140	鉄鉢之記	元照律師	
		141	歌掛物	在原業平	
		142	歌掛物	小野小町	
143		鉄鉢		追記	
9		144	秘密箱		「此中大事相伝書物多有之」
			已上添状九枚		

：現存が確認されるもの